

日本ピューリタニズム学会

2019 年度 関西研究会

開催日時：11月2日（土）15:30–17:15

場所：キャンパスプラザ京都 京都大学講習室（6階）

発表者：古家 弘幸（徳島文理大学総合政策学部）

タイトル：「ウィリアム・ロバートソンの生涯と著作」

司会：矢嶋直規（国際基督教大学）

〈報告要旨〉

本報告ではウィリアム・ロバートソン (William Robertson, 1721–1793) の生涯と著作を概観する。ロバートソンはスコットランド教会のグラズミア教区牧師として世に出たが、単なる一教区の牧師にとどまらず、やがて教会総会で「穏健派」の領袖 (1752–1780 年) となった。また 18 世紀のスコットランド啓蒙の時代において歴史学を代表する思想家にもなり、エディンバラ大学学長 (1762–1792 年) として、街の小さな学寮を欧州でもトップクラスの総合大学へ発展させるなど、スコットランド啓蒙を主導する役割を果たした。エディンバラ大学とスコットランド啓蒙の名声を、欧州を越えて北米にまで届かせたのは、他ならぬロバートソン自身の歴史書であり、ロバートソンこそ教会と大学、公共社会が協調して作り上げていったスコットランド啓蒙のシンボリック的存在であったと言える。

ロバートソンが受けた思想的影響は様々あるが、本報告ではストア哲学の重要性について言及したい。ロバートソンにとってストア哲学は、懐疑主義哲学に惹かれたヒュームとは異なって、歴史を偶然の要素から説明する余地を与えず、むしろ摂理 (Providence) の隠された作用を読み取る方向へとロバートソンの叙述を導く結果となった。とは言えこのことはロバートソンが、全てを説明できる究極の原因としての神を歴史叙述の導きとしたことを意味するわけではない。反対にロバートソンほど、文明の進化を無数の要素の相互作用からもたらされる複雑極まりないプロセスとして理解し、個々の状況を分析して全体の絡まりを丁寧に解きほぐしつつ精緻に描写した歴史家は、同時代にもそれ以前にも存在しなかった。ロバートソンは可能な限り客観的で中立的な叙述に徹した歴史家であり、自分たち自身の同時代の到達を暗黒の過去と対比させて描くという、啓蒙史家にありがちな陥穽を逃れていた点では、ヴォルテールやヒュームを凌ぐ存在である。歴史の中で文明の進歩を捉えつつ、歴史から教訓を正しく学ぶことでさらに文明は進歩し続けることが出来ると考えていた点に、歴史家ロバートソンの啓蒙思想家としての性格を見ることができる。